

唐太日記

下

ル 7
3577
2



門 7
號 3577
卷 2

飯田
石舟

甲唐太日記卷之下

身氣志郎 松浦弘 評注

廿五日月^六昨夜より引續きたる風雨にて船渡り憂^ふる
あり早朝より起出旅装^しる甲斐ありし糧食^を交^へりて
船^のり^とか^く空^{しく}日^は送^るる^のあ^らむ^も心^苦し^れる^も妻^人
共船^と出^るれ^ハ詮^有る^ハ船^を被^ハ一^冊の^とる^も船^根と^入
是^を来^りて^粥と^糗て^食ふ^にハ^少く^も苦^味あ^れる^も卷^舟乃^は
わ^くて^風味^雅あ^らる^のを^りま^に此^道り^をり^白鳥^とる^握を^は
或^ら之^を持^ちて^入る^も是^を入^るも^精け^き少^く余^も是^を

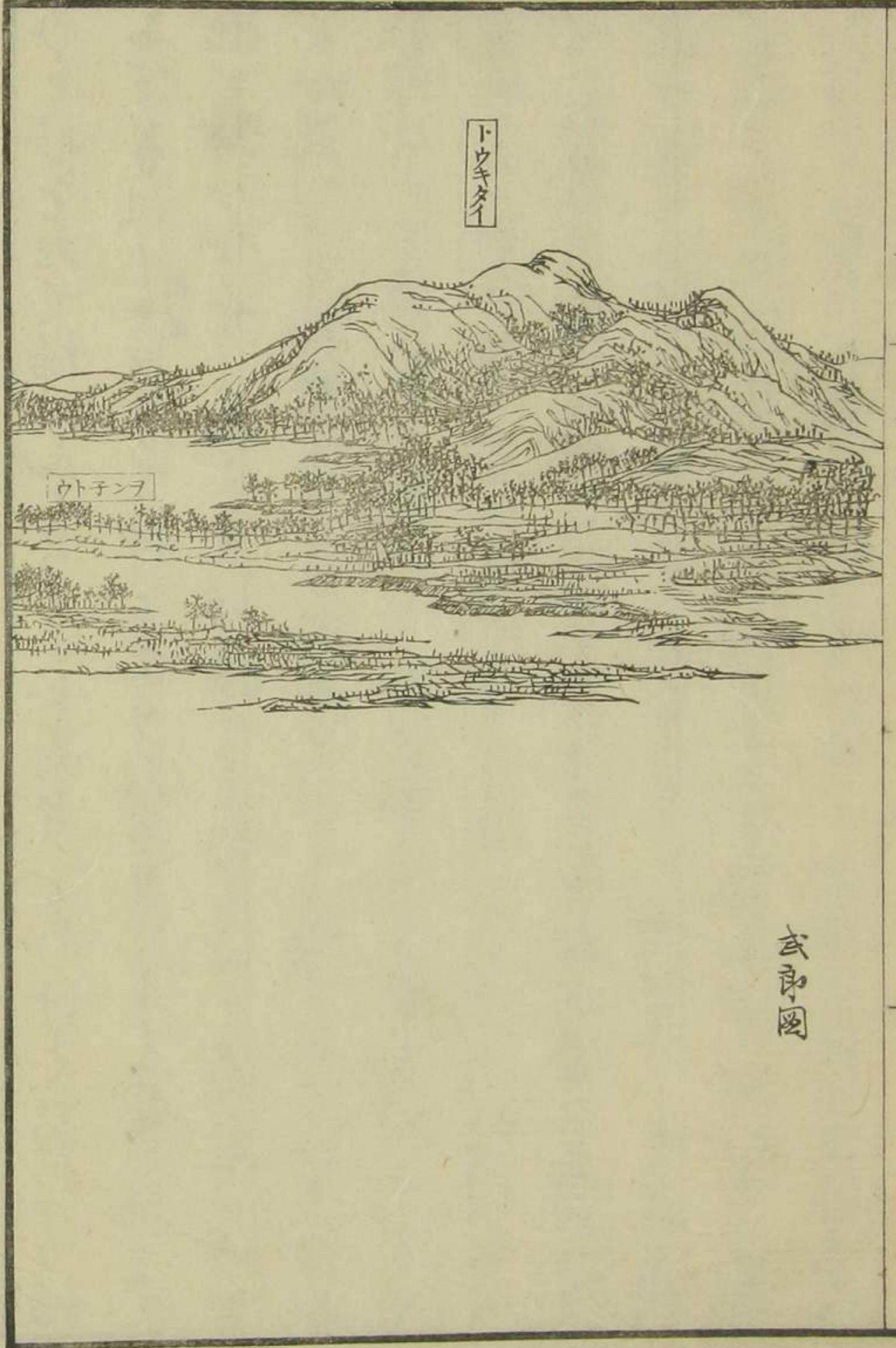


唐太日記 卷之下

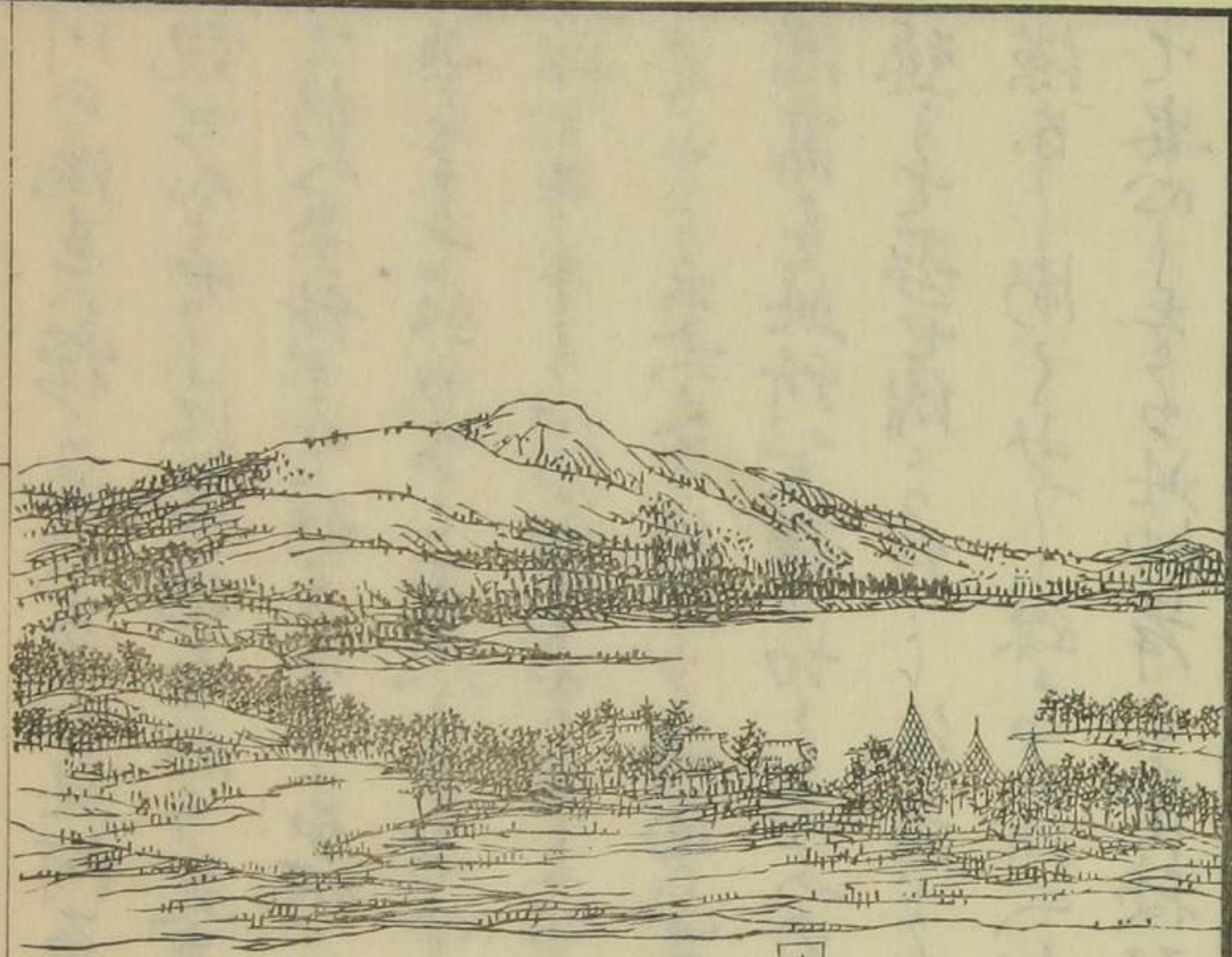
物けく揚きり總て妻家の不白中あること言傳へ堪へをたは
しあんとほつて廢物ふしを洗ひ口嗽んとほふ鹽あり
倍て余と指を倒さるし一處の方へ水と入是くても度ひ
ちと嗽まききりし火神とてわを割是石の凹きり
火を入まきり

注此石をルウタカの水源よりを出入等船橋よりちりし耐
刻り取らる諸方へ配分せりとのしり運上屋近所の出
入等へ随分火神位へ入れも此石を用ひり此石の
風を吹りたり實は石を赤霞散とて赤くものなり
是種物も餘り小庭の上の穢きこれへ倚り掛る掃の物

のまをぬて掃りんとせし女妻妾をあけく留めし後
小室のまはイナヲとて神を祭りたるものよしあり神を
地と掃りんとせし女妻妾揚るもむありと辛苦の中よ
も一節より扱回るもより風多し少く穢きなりたきは出
船せしめ妻妾人共く結問はる小此庭よりを里余川を下りて
海にそむふの岸へ海多あれもは所赤壁とて風波甚き
所の船繋ぎありと程しとわり余乃ちを吉野寺と連て海の
容子と母より出まきり實は妻人の言の如く風波ありとて吟
息畏るゝの状あり此海船妻の千島東沙都伽^{カムサツカ}連り
たるより船はとも照る瘴ものちく物清き体ありは是を



武郎園



ナイフツ

海をくぐり
 舟をゆくと
 夕にあらは
 わのひらき
 うけくば
 篤

川の流を不穩に見せしむ此河原に鶴白鳥群居る或物も
 鏡せんとせしに忽飛去れり又まよふ小舟を歸り先川を下り
 て初へ所をて初まるとよ何れしとも船客ら見ざる時ハ到
 返りて初めると美人との逢すりて擣く擣く言さるは
 船と出せり川に船を重余も下り海面は出たりの方ナエラ
 ツトウと云大なる沼あり海面は高波お寄河水激流して船
 漂蕩を此所を擣く切く向ふの岸は急んと流る赤土の陸
 壁として雲せぬりたし海岸よりお寄たる枯木乱れ擣く空
 際あり擣く少く疎なる所へ船とさへ入るは飛りり始
 て安心しとら此切岸は余杖路して數字と題せり

注此崖赤砂更りの土りてき度くこの洪水は崩落するあり
 ように記しあるも惜哉き月をも待たしと消去せんは難事
 さら何を記しあるにやらん思ふと日本の果とも書かば
 ちと舟と一舟とぬ

夫より絶壁の上は擣くをひ土りき海は此所一面の草系と松
 の枯木多しハナス カンサウ此外玫瑰萱竹ハ花盛る四五丁初て溪山より下りる
 小流は木の横りたる所の點しと重半余りてアイ地名と云所の
 美人小屋は宿也

注此地一面の平地東向して海岸白砂地して歩初ると悪
 一家の垣ら板山ナイフツのトウキタイは鎌手いたりその名

アイウシナイあるが今アイとのこを通てアイと草麻の
事ウシと多しナイと沢あり此草夏の沢目より多し故
に此名ありと思ふ

夷人各々タシトリと云余今朝ハ一と云その根を
米の粥屋に赤小豆の入り粥と食せし此夜腹痛し大に
悩めり終宵少くも睡と交り能くも能く寝ずし使君より
賜ひし正氣散と用ひて曉方少くも寝るこあり故に
数程大に延引せり

夷家より刺もあし一笠もあし一燵もあし一履もあし一
ハコけし難儀なるものあり

廿六日今朝の晴きり四時過ぎにアイと出りし腹痛して大に
氣力を損し食氣あられいし候き出りし草系を或て丁にて
海辺より又或て丁にてアイベツと云小川を舟にて渡り或里
程してシルト口^{地名}夷家より朝飯とあり今日に出
るに其志ありし暑氣と催ふより小川所よりあり又
五里程してワタサン^{地名}ありワタサンベツ船渡りて越えて三丁程
あり居村にて名ヲマニ子^{人名}の家より投宿と

注此地も同く東向素溪よりしてワタサンベツと云川あり其
北岸に楊柳赤楊等の山際より家畜をワタサン砂にサンを
流し出る候此川筋石砂流し出るとして号する

此家余程廣く四間より五間もあつし糧或りあつて鼻氣も腐
 直養の書状を通張り有て玄米と斗をミラ、ヲロよ残し一五
 よ一也且糧米不給俱よトツリの嶮と擇り糶し即今西浦(赴く
 所)とわちとむ相を糶を脱して皆其肉を食ふ余は不使ふ
 きはとて白米を粥し煮て食せりあつし此海岸ナイフツ川が
 ミラ、ヲロ也よて平曠の沙場よてト、の木又ハ根夷松の林多々
 道よ後し

廿七日期より雨降りラヲタサンと出小川或り越武里余よてマ
 トマナイ川拾間余夫より七里半程よてキトウシ妻家武部
 此道とらふ以ハ大霧よて咫尺も辨れず此海四ノ海嶺の死

したるの半身砂に埋れらるり半ハ肉を切ぬりたり腹内
 太サ四半指のぬーキトウシ地妻家よ慧と糧上ノ海嶺の牌を
 掛り息吹吹く海嶺よて水豹の油を貯りて其形ち大
 胡蘆のあしは夷家船の切身と糧上ノ吊りたるハ鼻氣堪
 難一即三丁もてホロナイ川口四五間越てよて七里半程よて
 ベケレイベツ地名川中武と間夫よりやうて七里半程小川或りこら越
 てミラ、ヲロよ著と其入らよミラ、ヲロ川中四五間あり此所山
 小澤て村居とあつて後の山をイサラ地名ノホリと云イサラを元
 たるのノボリと山の名此山元きる所あり此山此山ノ山の
 鼻氣程海中よ著あつし

注此地の地形則本文の如くは村ら山の根ありて少く南と夏より北へ第一道の暗礁有る沼形をせたり地名を云ふと此地のろのラロと多量に儀あり

夷人の常食コロクニニコク、生かき油の草の莖を乾貯置き水煮して油換の油を少く入食と塩の食せ及玄米と少く色に濁して煮て粥とす。油換の油水釣の油を少く入食と脂換はる。帆立貝を盛り此村人家凡十二三軒あり。けきとも運上る。孫よりあり甲斐と云ふものあり。は皆老人子供病者のことあり。若き女夷の運上る。行あり。家居る女夷の懶惰なるもの甚く。て夜も忘る。打師朝

起ても水と煮るものあり。糖の端とて燭子と喫はる。あり。生織り。あつちの女夷の男夷の信したる。食事の子供をさせぬ。あり。小児の初歩の時より弓矢を拵て走り出さし。能く教へる。や弓張地は。張る。あつち。人。子。用。を。又。子供の日よりして此地の凡して男子は。古。小。刀。たり。小。刀。の。形。挺。を。腰。に。提。女。子。は。提。を。提。き。り。や。り。男。子。女。子。共。に。十。四。五。寸。也。は。前。髪。子。エ。キ。シ。ボ。と。い。ふ。もの。は。附。し。り。

注エキシボといふ形は儀と云ふ。及此処或三ヶ所のろのあつち山祖渡りの青玉と三斗斗も三角形を系りて本孫(渡り)附是と前髪より玉極美まことの形なり

サキとの間より一湾をぬりて所マヌイヘツと云あり其
 南岬の家名一後ろの櫃本を云申ふ一の沼あり此沼
 水の落はあり故に急水のよし帰路西境へ越るふ此川
 筋は入るあり川の北岸七八丁よりハコタンと云処有るは
 堀君の宮あり一鹿島の社あり夷人等々願ひの削花エナホと
 深美中にまきし海 皇國の御威積と題するの形象と我
 こゝをきりける

ワレ岬陸陸奇事ありホウコタンと云所夷小屋ありと云人も
 石匠夫より大なる石ありクサレ子グと云夷小屋あり此処より
 マヌイより海上九三里と云志あり体はひ当処のルニハ子人
 名

と云夷人と嚮きこして浪絶ひして釣ふムシリと云難き
 鳴ありて鰐群居ると駁し五六丁より一の岩海中一後ろ
 踏をきりし

注此御向の夷人の行処と云志ありあるれと云ら子カベロシ
 ナイの者あり此地五丁計の素浪より右るウニエンヘシ
 たりるリエンコタン子岬は對峙して一小湾と稱ふありの
 島あり後ろの櫃本を云はる川あり生や岸より家名此地
 名を子カツプウニナイの能りある魚一此能鷓鴣カモハツと
 乃つとエトヒリカをぬりて来りて生餘さぬの水鳥よの歌
 島(帯)に群をけり故に此島あり子カツプを名けりして

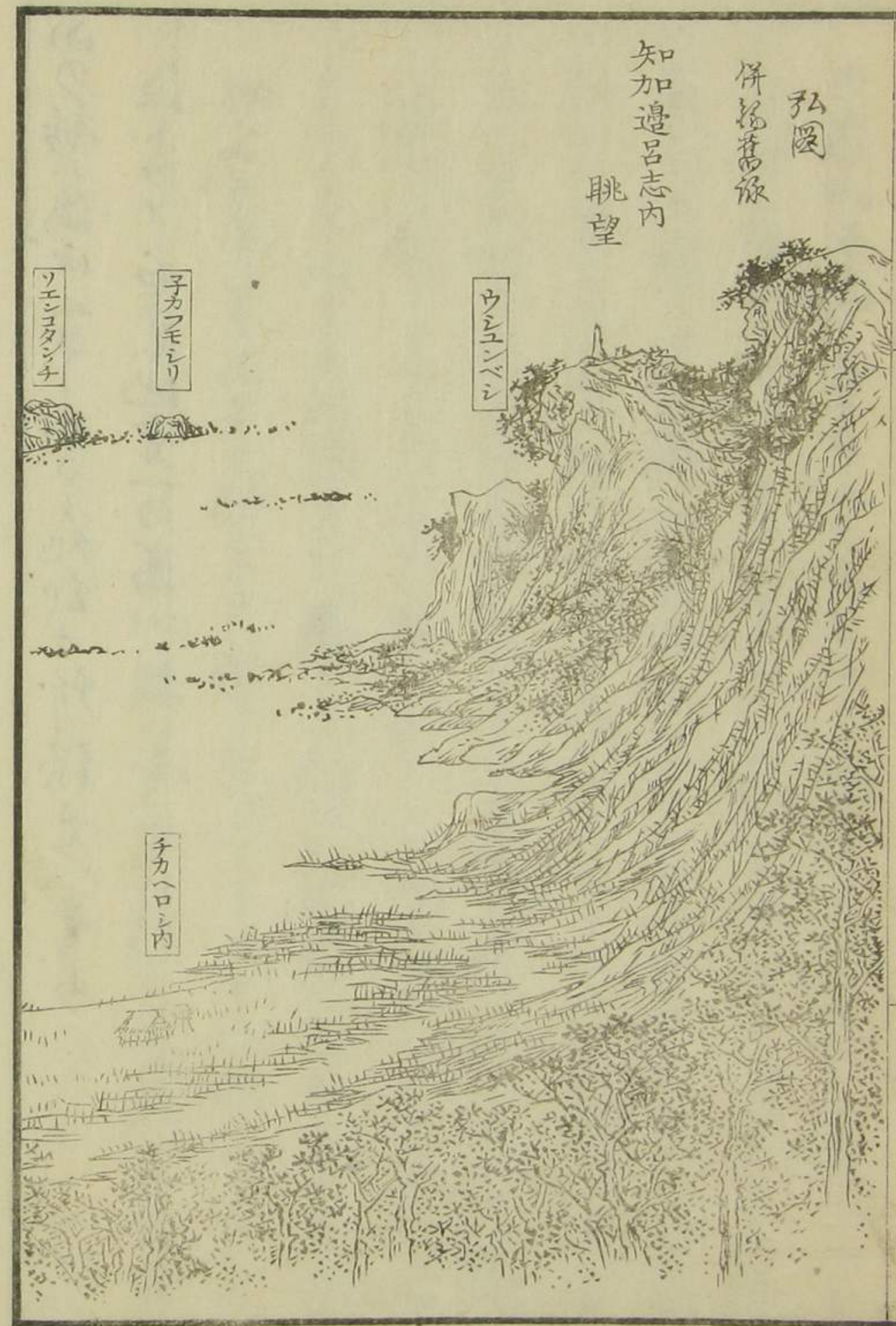
ウシと多しとつて故あり

夫より岩屋中を初り十間餘まで始りあけりこの屋より出り此所よりテカリマとつて奇石あり爰よりトツソの山の側面を見ゆ巔雲は隠れて見えず余トツソの麓より登りんとつてふまゝに潮満る去路を失りじと云ふ處まで退ると云余押すす處或ハ潮膝の上まで来り又いささか石穴を潜り一岬と云れりまゝ先より一岬ありて漸く之拾丁余を経てトツソの麓なる海岸小岬より是より海壁より潮水添く一歩も進めかゝトツソの樹木生えりこゝ高山として麓の方こそ余の所赤壁より雲室余も有海一爰より一條の瀑布ありニライといふは此處の方

山の裾は海中へさゝりて是れ也即ち所経るべきなり

注トツソと東地才一の高山巔奇岩簇々として登りて其形ちリイシリより似たり依て出入リイシリの婦山メコヤマありと云やこりイシリも此即ち奥より援て彼處へ飛去りてなる其後一跡とつてその大なる沼と成り山雲著しきなり其往來の出入必し此麓の字ノホリホと云所へ船と云せて削花エナラを作して有り初まらぬ余チカハロニナイより先め廻ハ船にて過りしる形も何成りあるや其處より知れり其大岩穴といふはバツテレチといひく穴の形も援と云儀の岩岬ありしやとテカリマと云るは此岩岬の形あり

私園
併松蔭
知加邊呂志内
眺望



ウシユベシ

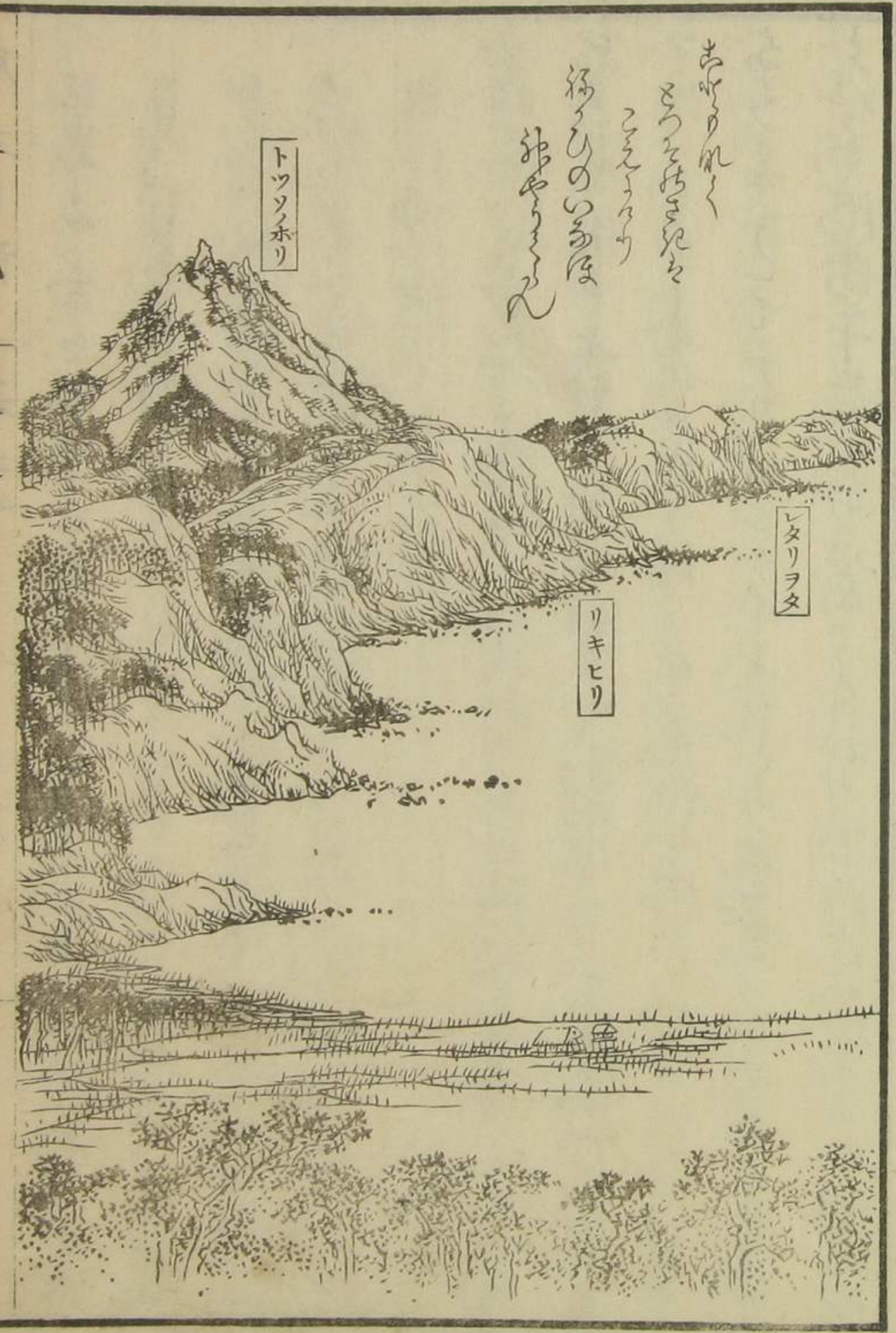
子カフモシ

ソエノタシチ

チカヘロシ内

あまのれ
こころを
こころを
つらひのこころ
おもしろ

トツソホリ



レタリヲタ

リキヒリ

多^ク余程暑氣を催きりされとも綿入の朋^{トウキ}若^{ハンテシ}律^{カツバ}切合^{カフ}羽^カ振^フま^ハの
て日向と歩初たきとも汗もあはして無候志多^ク魚^{イサ}〜

廿九日朝晴^{アサハレ}と^シマ^マヌイ川を船^{フネ}して沿^ツり初^ハま^ハり市^チ拾^シ四^シ五^ゴ間^マも有^リ
廻^マり西岸^セ櫃^ツの木^キ林^{リン}と^シ水^{ミヅ}まで清^ス冷^レあり^シ尤^{モト}右^ミの属^リ虫^{ムシ}凡^ソ武^ブ里^リ余^ノ
して^テ子^コア^ア二^ニ地^チと^シ云^ク処^トと^シ云^ク今^{イマ}日^ニも亦^モ山^{ヤマ}路^ヂへ分^ワけ入^イる^レハ例^{レイ}の^ノア^アツ^ツ
と^シ若^カと^シ乃^ノ路^ヂ傍^{ハタ}の木^キよ

芝^シ愛^{アイ}山^{ヤマ}と^シけ^ケ衣^イ袖^{スエ}せ^セと^シみ^ミ令^リり^リ也^ヤ米^メら^ラ成^シ守^シぬ^ル志^シぬ^ル舞^マ〜
江^エ此^コ所^{シヨ}船^{フネ}と^シ圖^ズへ引^ヒ上^ノ置^キ是^{コト}より淺^シ路^ヂと^シ魚^{イサ}の^ノ心^{ココロ}あり^シ傍^{ハタ}て^テまの^ノ魚^{イサ}
あ^ハり^シ子^コツ^ツプ^プヤ^ヤン^ンゲ^ゲあ^ハり^シと^シ圖^ズ作り^ナら^レる

ま^ハり^シ山^{ヤマ}路^ヂと^シわ^ハり^シ此^コ所^{シヨ}と^シ云^ク云^クヤ^ヤも^モ芳^{ホト}ら^ラぬ^ル難^ガき^キと^シる^レも^モ兼^キ

て使^シ君^{キミ}の通^ツ行^{コウ}有^リへ^シ中^{ナカ}あ^ハれ^ハ直^{チキ}養^{ヤウ}夷^イ人^ニ命^{ノチ}して^シ草^{クサ}を^シ蒔^キせ^セ
あ^ハり^シ也^ヤ通^ツ行^{コウ}と^シて^シ耶^ヤと^シ又^{マタ}改^カと^シサ^サ山^{ヤマ}と^シ上^ノり^シ又^{マタ}汝^ニ
下^ノり^シ也^ヤと^シ度^{タク}して^シま^ハり^シ山^{ヤマ}と^シ絶^ツり^シ〜^ト処^トと^シ休^ユむ^ル此^コ辺^ヘケ^ケヨ^ヨミ^ミウ^ウン^ン
と^シ云^ク処^トは^ハ使^シ君^{キミ}の^ノ為^メに^シ仮^カ小^コ庭^{テイ}を^シ掛^ケき^テ中^{ナカ}あ^ハれ^ハと^シ余^ノ知^チら^レり^シ也^ヤハ
寄^ヨり^シて^シ見^ミら^レり^シ是^{コト}より^シま^ハり^シた^タと^シ里^リ半^{ハン}程^{ジョウ}と^シて^シ夷^イ人^ニ等^ト武^ブ人^ニ來^キる^ル
小^コ庭^{テイ}不^フ言^{ゴン}語^ゴ不^フ通^ツ空^{クウ}を^シ別^{ベツ}き^テ去^クる^ル將^{マダ}して^シ豊^{トウ}吉^{キチ}路^ヂより^シ來^キり^シ〜
彼^カ武^ブ人^ニハ^ハ西^セ北^{ホク}迴^ク滿^{マン}の方^{カタ}より^シ東^{トウ}地^ヂへ^シ白^{ハク}米^メと^シ出^デせ^テる^ルあり^シ傍^{ハタ}て^テその^ノ内^ノ
五^ゴ律^{リツ}余^ノ分^{ブン}て^シお^ハり^シと^シ同^{ドウ}約^{ヤク}今^{イマ}宵^ヨより^シ白^{ハク}米^メを^シ食^シと^シて^シ喜^キ
ふ^ル又^{マタ}は^ハ路^ヂより^シ來^キる^ルもの^ノを^シ鱒^{マス}の^ノ皮^カを^シ煮^ニる^ルの^ノと^シま^ハり^シ尾^ビ拵^ヂひ^ヒぬ^ルは^ハり^シ是^{コト}
と^シ瀬^セの^ノ處^トて^シ改^カの^ノこ^ノ倉^{クラ}と^シ捨^スて^テる^ルあり^シと^シ丸^{マル}糞^{フン}と^シ魚^{イサ}の^ノ皮^カの^ノ食^シ

ちく余ら捨直し魚を煮たり不儀と別肉を割て焚火して
 炙るに醬を添へ余貯るを味の難味等と評して食し味甚
 上哉此穀は海辺に宿したまへも魚不足して食せし昨夜
 漸く一箇を嚼きしれども鮮魚を食しけり今日と玉國も類
 のため不美味と嘗めし又昨夜煮米して釀し白酒を拵
 來りて船の上り場にて美人ともお寄嘴しりてサーブニ
 余ら嚮たりて別加らりてり酒業維に入り拵來りサーブ
 二と一連は五六杯を傾て心地宜氣あり余少く嘗て飲し不
 醒の膏うらみやくしり少く其味は甚く醒まりの甚くはり
 小高き処に或は或は元武里余と自ふ交り直養の宿し

昔も小舟掛よりして一宿せり

注按とらに此処元カアマナイとの事ありてり水宮あり
 初出入者昔より山越の千円の必止宿とて思ふなりと

晦日朝曇りたりき余とて大木の倒建する所は体も此木
 美人とも本幣とてき余ら又鉄の矢の根影く刺しり此處
 千トカン又しともいふなり

注此樹數圍の方本形ありて武二千年前倒建しとも此處の
 の出入り勢と識んるは此木の輪に向て射ちり其的とあり
 ありとも此を生涯やある獲物とて射換りてはしと
 之れく立願し皆試しりとも今も鐵矢を刺しり千トカン

射カシ又シとらあり利を澤のよりあり同名トシナイ
ナマ越りもありまゝワールのサ北ニマリよると子モ口越等
其條所くありあり

此前後分水嶺あり夫より武里余躋攀してクニシナイの川上
字ニベアケとのあり出まゝり此処より上川ウエカハ前サカ今同せ抗あり余此
所にて樹を削りて

東涯探遍又西涯短褐孤筇涉峻奇嘗盡瘴嵐多少苦便

知我亦一男兒

此所より船を渡りて後より是を直養と命してとせ置るなり也
是より乗船して多人多し船底をこすりしハ沙は積りて

傾くとも危くありき艘の船より荷物人まとも乗船して六人
漕りたるよりまより居を極めて多く二里余たりてクニ
シナイの署と

輕風一路掉漁船六月荒陬未脱綿兩岫幽禽弄嬌舌韶華
長駐九春川

此所夷家四五軒あれども人家ハま軒のより一室は仮小屋を建
たり此番人と馬吉と云上川は從ひて其地ホロコタン地名まで行
き長吉川就作を連て是ゆりたるよりありさうてクニシナイ
川落口を拾間もあうライチ地名カ地名の川落口を是より信すと
馬吉の物語あり

注此所西海岬平地一條の川あり先生舟とてありしは海也
 又家ハ川の南岸より此処吾らウスの舟にわらるエニルカ岸
 タクタクヘウシの岬對峙し一小湾とるは初は波浪穏く已
 故に此名あるクシエニと浪無と云候なり

夫より遠傳ひ武里余よりナヨロと著し由所乙名ト克蘭ケ
 人の家より此ト克蘭ケと揚忠貞といふ者の曾孫あり
 一今日ハ直養の郷をこして家より居るは生妻なるへ一夫婦
 鯨の切肉を入りて煮く妻人共は振舞振子あり船の端より
 サアブニ人ケトウシ人トメカアイノ人坐せり又此家より居る白髮の老
 人同く坐りたりト克蘭ケ又あるの各海廟と本より傳りて是

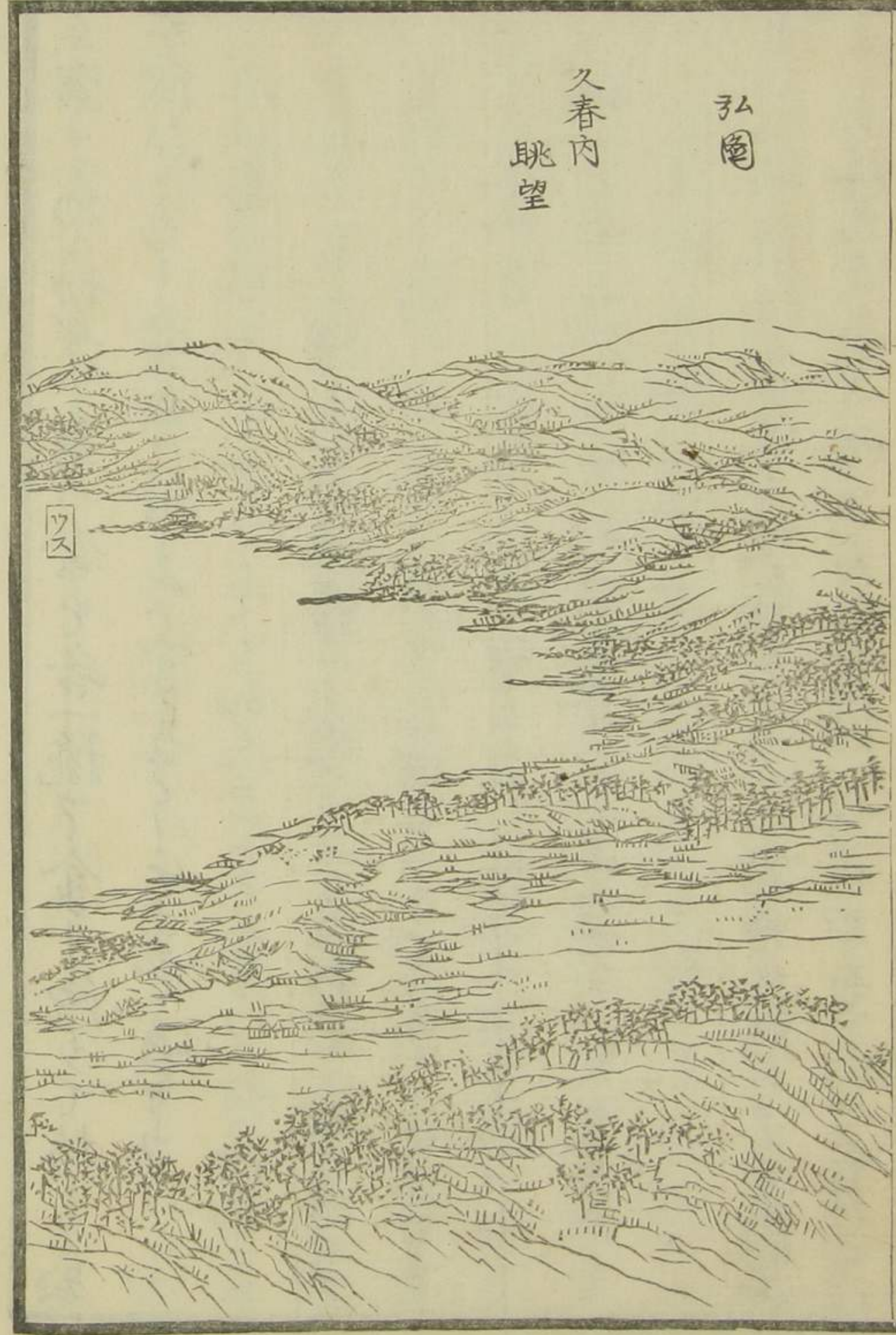
く塗らる物も切身と盛て食と各一椀の食し終りて持て置
 を拭ひよる一毒或ハ袖とてふあるとて妻へ返せり

注此島の風とて出入りとも和入めても客の村ハ行船と云
 りぬく直に端とて若振舞と例し一五部有る村ハ暑む
 五部より一種の食物と持来りて饗せり其食器ハ多分帆立貝
 ちのちありて小判形より彫りし木に持廻り耳と脚の物あり
 是と子マと心しりて食し奉りて必とて本文の云く
 一島に神とて拭ひ返り洗せりといふは其の神

妻いそ海に洗ひませしとて箱中よりウサ黄鼠の皮ト克蘭ケ人返
 来り余揚忠貞の物なり一是神の皮也其言を以て言はし

弘園

久春内
眺望

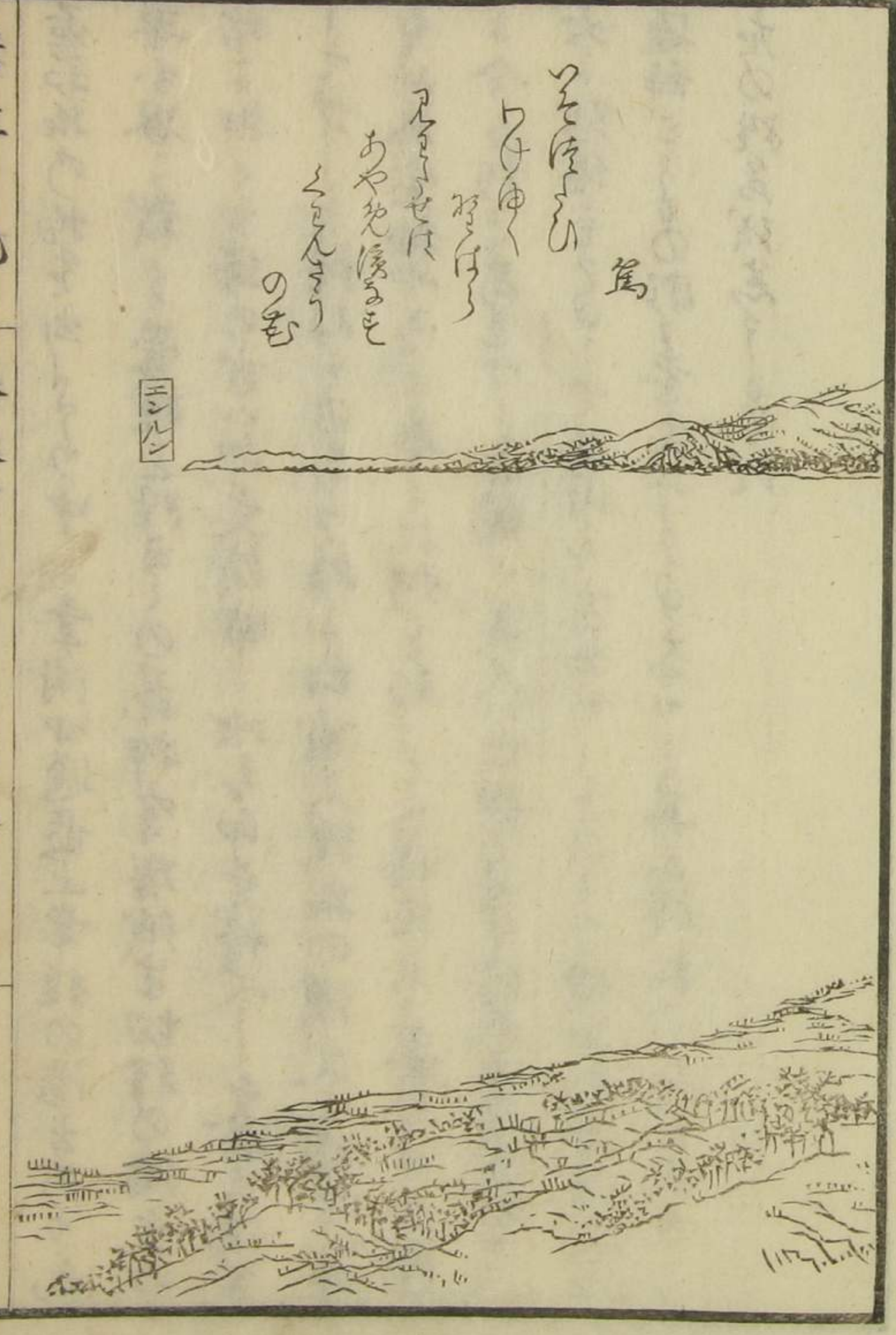


ツス

爲

つとほし
つとほし
あやめ候き
くまのり
のき

三ノ



孟和指の物を出しし中より其附四通最上常經の添出ありて
 要分界に載るる管理之姓々の花押有唐紙半切程の滿文の
 始に押しり端の方ハ印文消滅一次に印文僅へり文章ハ滿字
 として少くも讀むものあり外ハ或通尺讀指の漢文と滿字一を
 有此外宝物やると尋に何と物と云揚忠兵と墓のりも尋
 今と朽と志述すと云總て美入ハ亡親のり他又より言をきは
 大に愁傷とるりて其附之言出せしものより償とむとるり好
 通辭とるりの彫り書とあるりとのありと其ハ傍指のこの上包り
 左の姓名或志とるり

寛政四年壬子五月廿六日

最上 徳内常短
和田兵太夫典恒

文化五年戊辰六月廿日

小林源之助豊章
最上 徳内常短

奉

旨賞赫哲來之佐領付勤璋等抵至徳撈賞烏林
 查得各處各姓哈賚達俱赴前來領賞惟陶姓哈
 賚達近年以來總未抵來領賞每年憑以滿文劄
 付領取似此情形寔非辦公之道耳聞西數大國

與陶姓人往來是面是以煩勞
 貴官如遇陶姓人切爾曉諭令伊明年六月中旬
 前來領賞如不抵至即將此姓人銷除永不恩賞
 故此特懇

賞烏林官

佐領付勒琿

雲騎尉凌善

防禦德僧尼

宣統四年正月廿六日

景土野山

嘉慶廿三年夷則月十五

耳聞

兩散大國原因並未知情吾未

大清大國恩賞烏林亦來者各官負以直驗者不
 負自國故此賴一日來若有順使者此處原由一
 竝分別稍來親直須知寔荷
 大清大國官負

拜純



嘉慶廿三年庚辰月十五

再聞

此封通本書よりあるは、
似きるものなり

清用

此書付の写を以て江戸表への上書は、
馬込佐治より出た切に後遺り事

カラフト島

ナヨロ佐吏

ヤエンコロアイ

此書の前と帯紐の白字あり

注此処西成向流溪形一々如て海岸崩岸多し一帯一條の川ありて其兩岸より人家十余軒家屋をナイラロを伏たき一々いひ候あり

七月朔日 朝晴きくうニト克蘭人^名の家を前の川と小舟にて流に渡り出たり是より七里程赤土の切岸にて潮橋より東の所あり風波より通行むて難候のより一丈よりしてヒハツ川を越ニラララロもある此処夷小屋あり休む是より此所の土人サンケアイノと名あり一拾所程にてカウマナイサシヤと拾所もあるマラナイ拾四丁とありトマリラロ此処川口中部十間程打聞きたる所あり夷家あり是より七里余も行て奇巖多し此

は到る此處海中に水豹多し一鳴礁と名あり此処海中に岩あり大岩ありて路通せと山へ上り又直下りたり是を坂一帯と打教あり

注此島を奇威島と名あり坂地ありとあり此島にて多し候て島夷甚も彼水獣皮をて製せし帯と履く候て此帯を絨凌く名ありありはなと履靴の用心とあり又け靴とあり和人の信一又靴を討て天氣をより海荒るよりのひ候あり

夫よりヲテツコロの間九七里余も有へし奇あり瀑布あり其水端よりありて微塵も砕けて霧となり瀑布の形とあり

又流水巖は海の苔のさびと作りり水柱のゆくあつて幾條も
 落ありヲテツコロといふ小川と海とつら所にて從ひあつサアア
 二人と女の子の後まゝり運よきつと此処より海岸浪打際とた
 とり絶壁と作りし潮のさびと運ハ全身濡るもあり大船
 たる溪と暫時越く嶺石長耳通路後所より此処とツウカイ
 とつらよ一此海中の岩は海標一段横りり即ちと想を統せし
 小中りたる指するれもさき海の中轉ひ落て初方知れは
 危角する内日を暮かて雨を降出さるより後壁と作り
 せりふその上泥濘深く草の丈高くして喰急言愈々も
 あつと漸く山上に記より又伏より岩水と越さるん又向ふ

大なる山あり鷲きたれども徑を助し草根を取附枝は助し鳥
 遠くより思慮中と初深草の内樹木の横りり所々道は険し
 小なる方角とあせとけさるるサンケアイノ人各と猶先きほどみ
 手槍とを助し建直さるるあ道は能くすつらみて油物を撥
 かけすつら初め此の敷敷とて漸く下り坂ありたり所々窮
 て難所として泥濘深くき歩とあすれい忽ち渾身濡るる處
 指あり余愛して疲憊極まり進退窮し漸く去る言と夫
 人等引きてさきとと向う障りぬ幸りして夜三更の途も
 有過し海辺にたつり流連する腰とけ須臾息をたすまふ
 とき或丁歩りて飯を食ふる

注此所おろくはホントマリある處、此處きふ女の子并
 セカチ カナ子等也も通約いさし、是般ち有るありナヨ
 よう凡八里半計と思つる志、是のさうして、さよはを信
 也此難儀なり、あつたあつた、不審なり、むもツウカイの
 信の轉ち石して難おるれ、さうして、此園のあつた、
 り、してトツソの候と、さうして、奥深く探さんとの心をせ、何
 なる、あひり、や、心此能彼、さよ、比さる、時、さうして、一の難、
 も、あつた、

此被新に作り、さうして、庭園の候、さうして、人の居、何、さうして、
 あり、唯火を焚、さうして、跡の、さうして、皆、さうして、お、さうして、

とせん、と、存儀、と、此、遊、美、吾、住、さ、人、の、れ、是、さうして、先、バイ、カラ
 サム、地、と、云、所、さうして、表、位、も、あ、れ、も、四、里、事、も、あ、ら、う、お、り、手、陰、を
 た、さ、て、今、宵、は、只、此、事、さうして、夜、の、あ、つ、た、さうして、あ、り、さ、れ、も、荷、を、負
 う、る、美、人、と、も、跡、さうして、あ、つ、た、さうして、あ、つ、た、さうして、思、つ、た、溪、邊、に、火、を、焚、つ、て
 上、り、お、り、並、坐、せ、り、湯、を、沸、か、し、て、湯、も、あ、つ、た、れ、の、曲、の、り、水、を、取
 入、り、吾、も、余、ら、茶、碗、の、水、を、入、焚、火、の、旁、を、居、る、れ、い、と、い、ふ、沸、か、し、
 是、は、砂、糖、の、サ、し、貯、つ、た、入、り、吾、も、あ、つ、た、さうして、あ、つ、た、さうして、一、袋、携、え、
 きて、さうして、極、夷、の、あ、つ、た、さうして、あ、つ、た、さうして、是、の、れ、一、雨、を、以、て、さうして、
 根、湯、り、取、ち、り、濡、ら、れ、り、礎、の、あ、つ、た、さうして、あ、つ、た、さうして、お、被、ち、ぬ
 此、り、の、余、等、も、水、巻、物、を、僕、仕、助、を、告、サ、ン、ケ、アイ、ノ、人、の、は、は、て

其確ハ皆後退しつゝ終日の疲れヲ皆々延と被りてお妙と
 とも余ハ賊多ク能つと火ヲ南つて濡る夜成乾一又と妙と
 腹をく背と暖めたるは及サンケアイノ人ヲ少くも擧るる事と
 ちくき人火と守り居るは夜半なる迄より本勝と信し一延
 と被りたるまゝお妙とぬ

二日昨夜より雨降續ききり余夜酌の以目覚めて又火は
 たふサンケアイノ人ヲ支度して銃を擧ぐむ初より是ら此後
 是る人足の速ひは初くとお妙其精悍感と一とまより一睡
 ちく朝も以目覚めて起るは雨は強く降きり危角する内
 後退る人足女の子とも進み小急したるを告げたり漸と意を

皆々食らひ明日午飯の儘あれは出たら其美ありしと
 意を出て後退と礼を重も味りしは向うの方より帆がこえ
 たり余二艘居る船より一と思ふも向うの人も船一稍近
 つまらざる迄は又武里余と外よりあり海面幾四五丁余も濡る
 事所として停望せしむ被船より此方と見ゆ指さるる余は何
 とと思んを急かすお妙を命じて空砲を發せし須臾
 ちく被船よりちく砲と答へらしてちくよりして後居の船は
 と思ひきり途中揚せしれは心よかきものか人引込さんと踏
 躡せしちく帆と掛て走る船の向う遊着るは目的もかち危角
 思ひ煩くひく又き里余も外より一は妻人き人出迎しちく此の

カモイトノチツフありやと問ふに頭つきたり夫より小川に流る
大船 船
ハイカシは著きり

注記するに此所ハイカラサムシかと思ふる本名はハイカルサン
支を流りていふ也船番屋一棟あり其傍に小川あり後ろ
崎と云ふ岩壁地名ハイカルと春のさサシに流る下ると
いふ俄此川春雪融す其の流るるなり此名起りし
思ふ

豊吉の船夷船は荷物と積余より是に此所より舟を運り余は
云かりし船は昨夜ノタシヤム泊りして今朝船にのみひとと因
て先の船の客跡を得る直養は昨夜ノタシヤム泊りたるは

おまけに面福して事情とも福たれ孫は余の僅に五六丁の遠
よりノタシヤム地名よりいりて遠懐いふはりり余愛あり
河平の末氏 河津 平山 一書と出せり是よその事情は直養福したん
と知りて唯突岬の嶺を探りしり城跡をいふ愛を出て石
溪と半里程ありてノタシヤムと云

注此地西向小石溪五六丁も続きたり右にアサウシマキ岬
たり左ホロヒラのサキ岬とてお對しとて後舟に其間一小湾を
かき遶南よりトロの崎と云ふ一條の川ありて此小岸に
番屋一棟夷家五六軒と云ふ漁場あり本名はラ
タサンと云ふ紙東地は同島ありと云ふとれくノタサンと云ふ

雲ありと云ふ

昨日より使君の泊る所ありて村垣使君らエンルモ
コマフとして引返され要路はさすれと云ふと知れりて夜は通行
家と宿を前して茶川を過してとらぬ所ありて先宿せ
よと云ふ余クニエンコタンと出てより十四日湯ありてせされ
是と喜ひて連日浴を此水と焼く歩臥きり此夜車の次
雷雨あり

同三日朝雨を以てり歌きり今日極寒なりと云ふ風
強けきと海上程あり武里余りて小川ありトウブツと
云ふりて上陸して明番をりて小憩す

注此所西向流りて九平山極本三川あり此水は沼あり地名ト
ウブツと沼の落口と云ふあり地名此処の川より云ふ起り
船を渡して乗船へ出する磯と傳ひて向う此所ノトロと云
九武里余もけり出ると云ふ又此岬と云うて武里も約トコタン
と著此處小山と後ろりて湾と云ふあり後ろりて小山と
沼あり離場所のよと云ふ番屋も六間と拾百程あり毎夫の
社あり妻家も十軒程あり也總て此辺の冬分官舎なりと
あり雪も五六尺位より深く降りてあり

注此所流航申南向急流存の方ノト岬たりエンルモコマ
フの岬對して突出りて間モコマフ近一大灣を成りきり

吾氣を市画

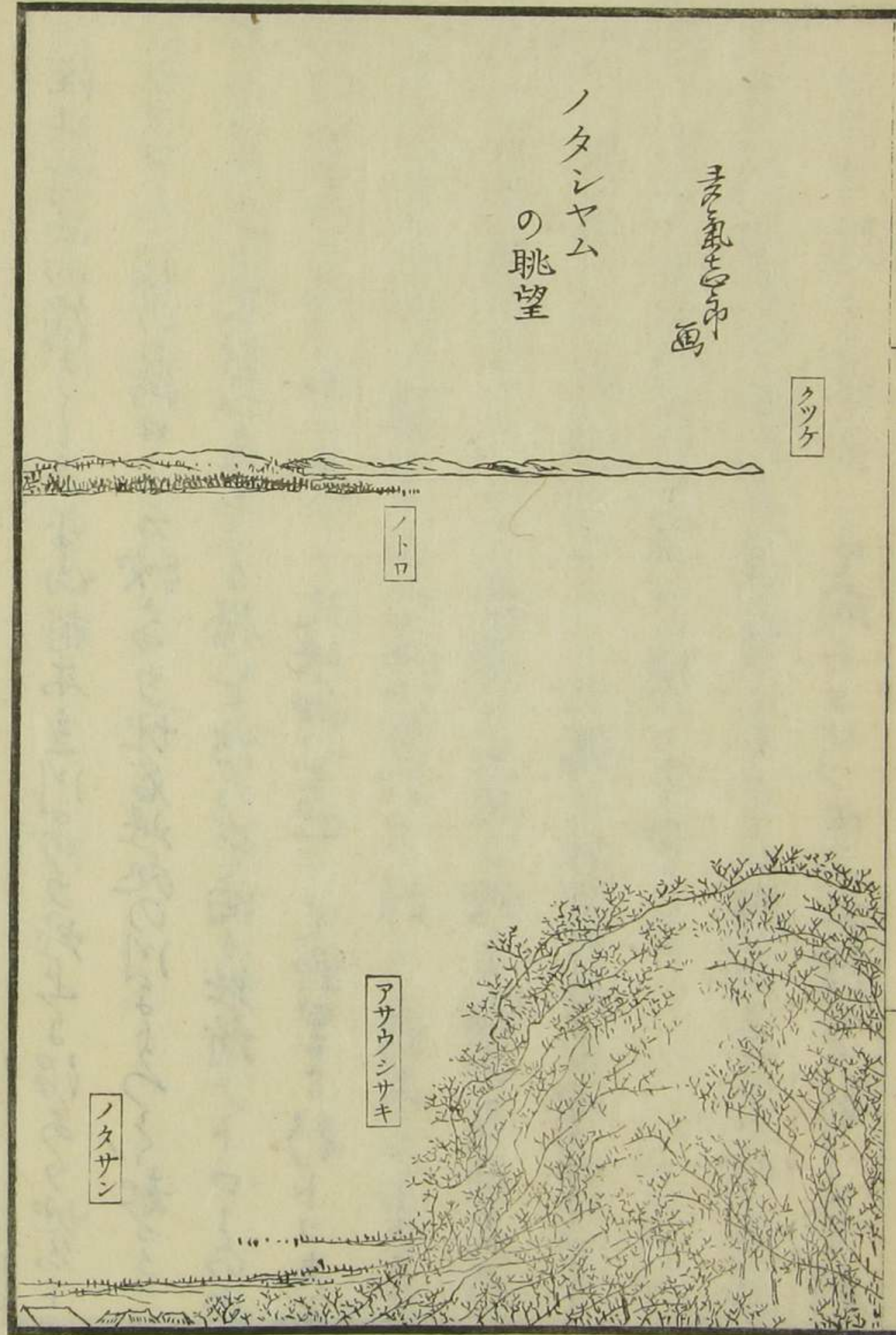
ノタシヤム
の眺望

クツケ

ノトロ

アサウシサキ

ノタサン

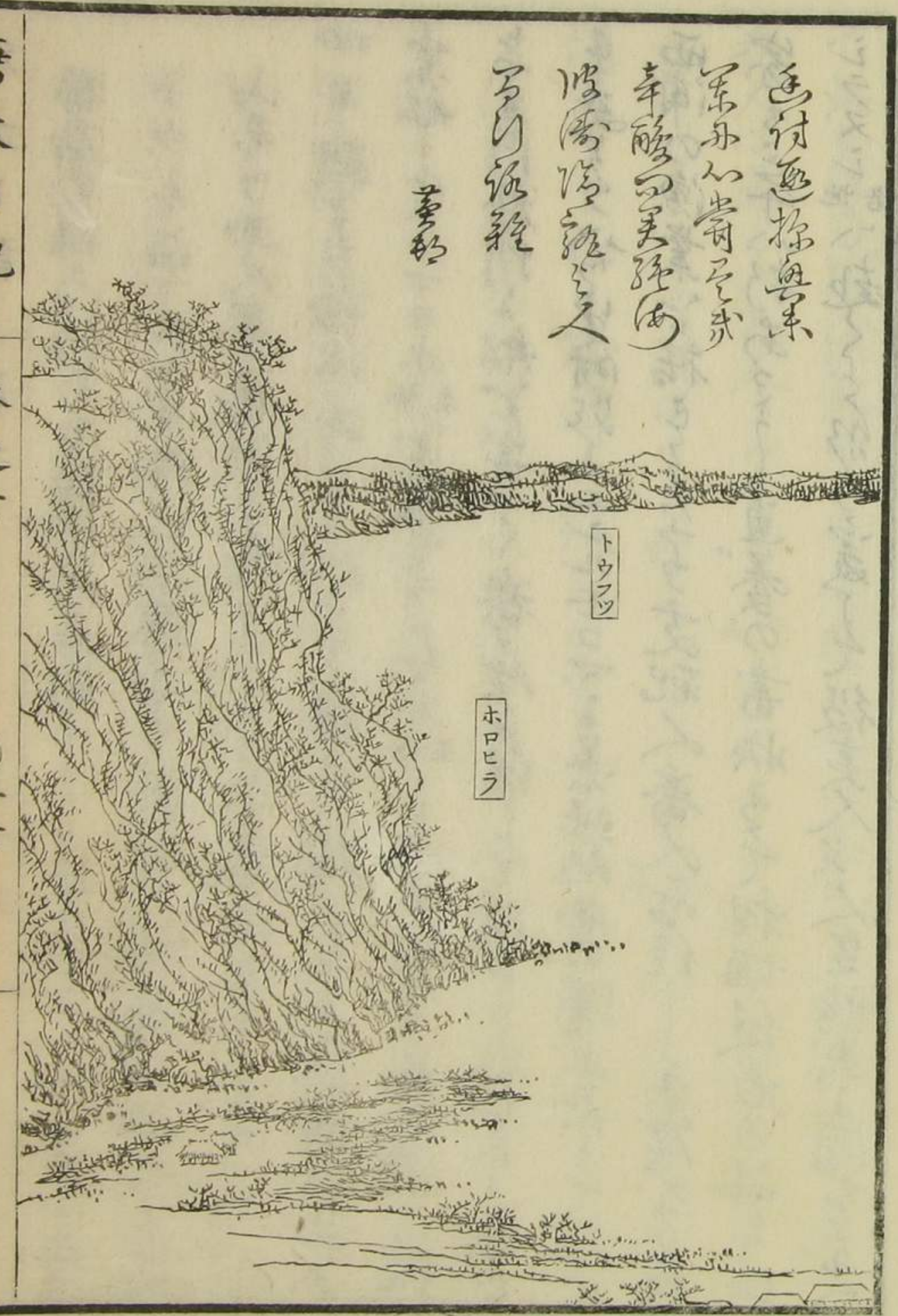


途付遊探無事
東舟心寄るそ亦
幸臨り美経海
波濤臨る流と人
りり流程

幸船

トウフツ

ホロヒラ



番屋の後ろ沼あり傍て此名起りし本名トウコタンあり
トウと沼コタンと知らる傍あり其上は橋スリバネと依りて
山あり土人等是とまたリイシリの妻山ありと云

四日朝より雨降出されとも海は穏なる床潭の前より
乗船してトマリホ地名と過てラクマカ地名より海より雨降り

とまよりハハ半時ほどエンルモコマと云此処西の運上を過て
西浦の漁業と括とらる支配人番人居住し是處より夷

家も二千ハ軒ありし直養の書状ありて村垣後君の跡を過
シラヌシ地名へ赴くと船の邊りて後夷人并人豆瓶夷は酒を乞

て此り迄の勞儀慰めり此運上屋の志より高山の頂を見分
番人は尋らる夷人トウキタイ地名と云又メノ子山と云此山より
霧立ちし山より洋中より望めはリイシリ地名と似し山メノ子の
稱ありと唯床潭の後ろの旁りて云々なる山あり

注此所南成より向ひトロコ小對一たらしみの岬あり是處を
号ししエンルレと岬のまをわらコマフと云といふ儼る一

道の暗礁ありし是角は太船を繋ぐ後ろの旁ラカイノホリ
山ホロノホリと云高山あり此洞より南流ルウタカの河より
越るよと流る運上屋船を合て貳拾余棟夷家三拾六軒
毎天社ありと美くお建せり

五日今日の朝より晴なり

注此島濛濛濡きまゝとて四季の空あたり無りて晴とて
十月一日もあまの雨きこひたあまあり此モコマフ二里前
後の処とて霧降しとて考ふ所敬て今日晴なりとて
よもなきへ一此辺よりトコタンまで番屋敷あり人烟
を渡るるされ依て志くくむかふなり

是より乗船してヒロチ^{地名}ヲホトマリ^{地名}ありとて行く何處も山の
裾して夷家なれどもお閑きたる処いん^{地名}とタナントマリ^{地名}と云
所より上陸しとて昼飯をとり番屋敷とて所見を賦しきり

處々黄茅倚翠微草深古徑没柴扉枕灣沙岬衝波瘦繞舎

溪流經雨肥窗小唯看山半截江平相映鳥雙飛漁村午靜

閑無事一縷炊煙人未歸

注此地溪形西向小石魚うく後ろの方平山概本モコマ
フより六里半陸行の止宿所あり処あり番屋敷小庵
等あり夷家むういあり今モコマフより引取てき朝も不任
夫より又舟に乗りて七の時前トコノホより着て此処を番屋
も多廣あり

注此所西向素溪在りウエンヒラと云山の岬右ヲタライチ
^{地名}と云一條の砂岬對峙して一小灣と称し川あり其南
岸番屋一棟板くく舟より夷家を新あり申の方十重里

ト、シマと眺む風系い見え方なり

六日昨夜半迄より雨降出、曉の迄より晴くなり、前夜より乗
船と海上数十里ふト、シマ城見方ウシニコ口^{地名}ナエボ^{地名}マツナ
^{地名}と通てハ、時迄モイレトマリ^{地名}は善と今日陸過せし所も
昨の路の如く皆山の裾のまゝ平地少しモイレトマリ^{地名}と
少しお開きたる処あり此番登りて帆立貝と焼の皿を用ひた
り風係るるものなり

注此処本文の如く山の裾がしお開し処は番登りあり余も
よま止宿と後形西向よりト、シマと對しより此島は
全海嶺多きより此島はわつとせ周囲七里より此処海より

七里有と云や又當所の地名モイレと休トマリと船瀬と云
係ありトコンホより七里と係あり

七日後日雨今朝の荷物と船積よりて余ら陸行しきり
よりモイレトマリよりシヨウニ^{地名}名ヤて九拾里余の百夷家
を新もあし中より山を遠くお開きたる処も河邊と小島
樹もあし小川所よりありて何處も歩行しよりあり行と
いふ処も小島と云ふ雨も強く降る食はまき所も
あり係てはあしとて歩行せしヤウニ^{地名}のみし手前も海畔も
從舟へて遠見しこれ船根のやうなる岩あり是をウエンチ^{地名}と
いふウエンと云ふより子ユニと注ありありし此岩海へ岩出て

海舟一葉を日ら船を入るるありあはるなり此稱ありし此岩の
裾四つ所と越て七つ時過しヨウニ地名と云ふ

注流形西向下ら小石ありて後ろの方峨たる高山極あり也

左らヤエンシユホ地名右ウエンチシ地名并ひ実出りし其間武庫牙

の間一小湾と称し又未の方よりイシリ地名レブンシリ地名を

見風系いん方ありし宿所一棟并い妻家二軒ありモエ

レトマリより九十里あり

八日朝より小雨今日も淫雨をレヨウニ地名と出て直に風風の

ゆるゆる絶壁あり海岸ありて道なきをさし陸の方切

岸と攀よりて度なき系と四五丁までありし海濱ありし是

より小川三つあり越て又絶壁の裾ありと出りてアカラカ地名と云

高山の裾と出る此辺大絶壁は極美松の碇列を斜に懸りたる

さ海系いん方ありしより大絶壁と云ふ大なる瀑布

武庫所あり唐書に浦中として始て入るる大淵なり中凡二間

も有る一とき所ハ少く捷なれども武庫と居りし其とき

とつ屋し此処と出りて岩の少くもて屋のあつふありたる

下は小憩し此石階は燕の巢あり美人探りて燕の雛をらと

得しより美りたる羽毛も見しこれいん所との処へ入らせきり

夫より之をわけて其間を半余りしてシラヌシ地名と云ふ村垣使君

直養守のいん所の辛若と語り合て皆く恙なき記をたす

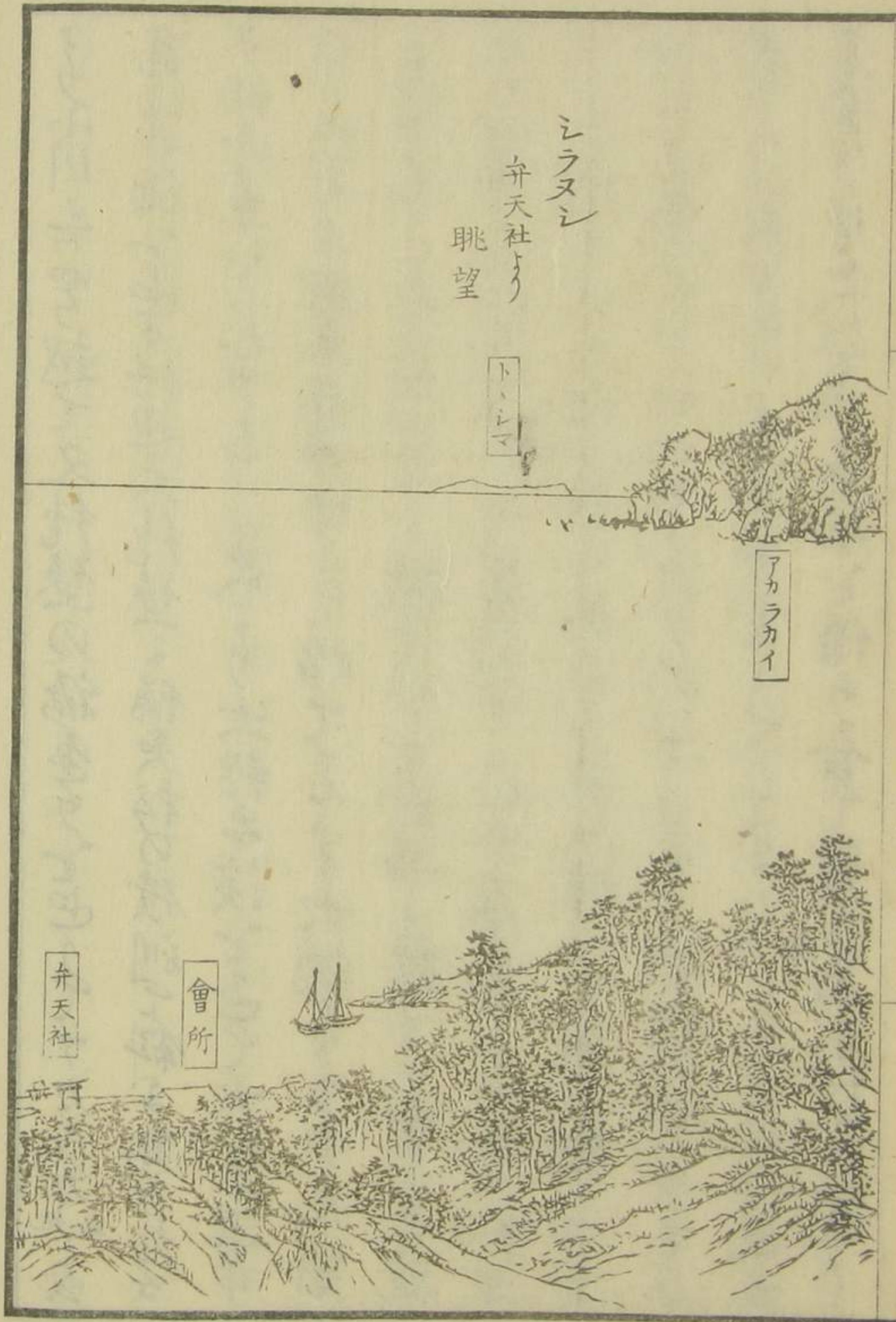
シラス

弁天社より

眺望

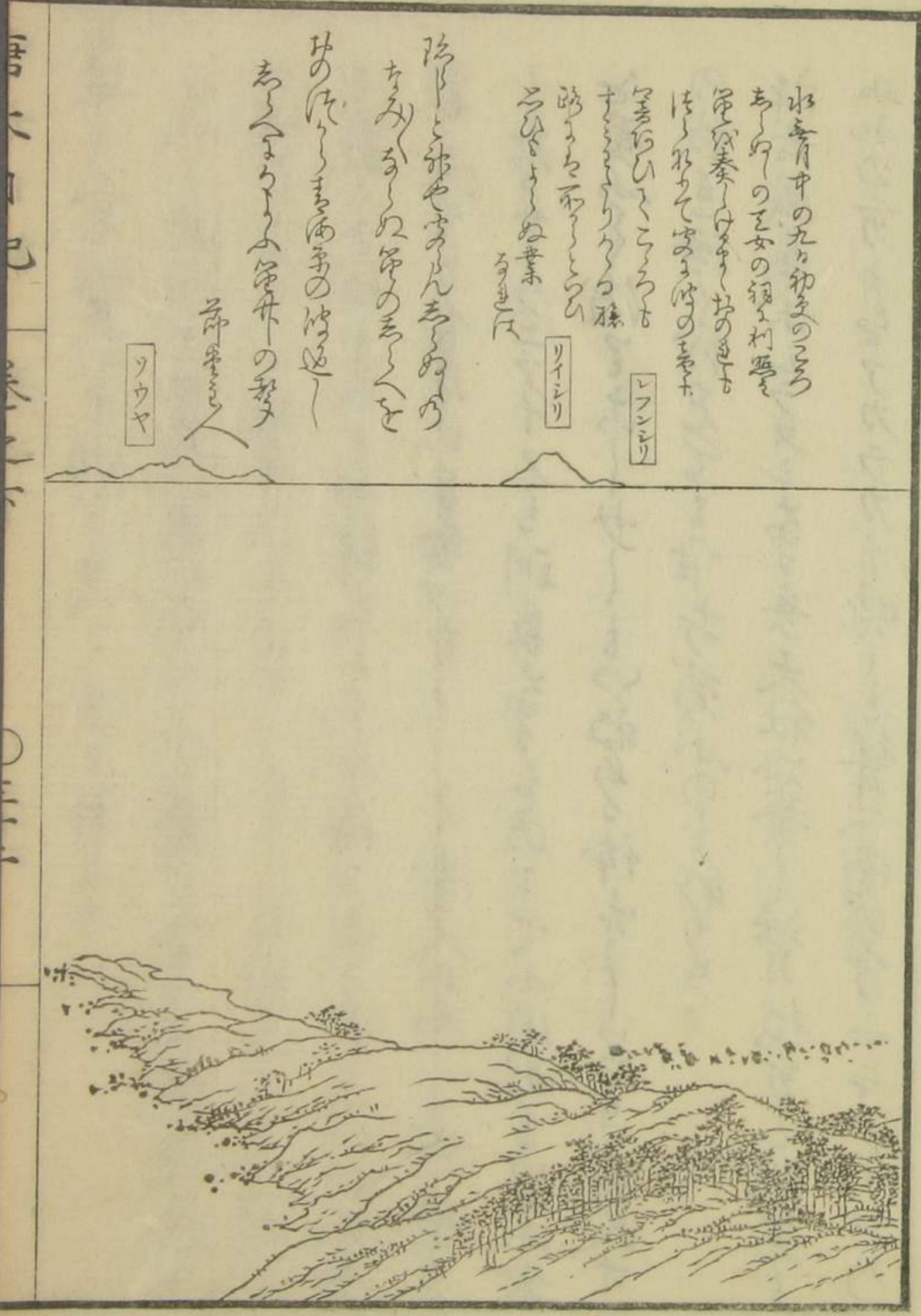
トシマ

アカラカイ



弁天社

會所



水鏡中の九月初五のころ

あつたの正女の御立廻り

御立廻り(ひまわり)のまはり

はくねりてつたまのまはり

ひまわり(ひまわり)のまはり

ひまわり(ひまわり)のまはり

あつたの正女の御立廻り

御立廻り(ひまわり)のまはり

あつたの正女の御立廻り

御立廻り(ひまわり)のまはり

ソウヤ

水鏡

百連一人は能くも酒を飲むと芳と懋とあり

とくも美人と悪直小児の如くして憂をくまきものあり程は
の同好も少くも物争ひする事もあらず若老ありとて別よ
る教も亦もあらず弱ありとて侮る事もあらず他人の
家へのても食用のを助けたりとて家人の如く余の郷を
したるサーフニアイノも訓良あるものにて小川ありとて余
と負つて酒をよみ少くもつねある体なり若くも美人は
の戯も強く成りて唯お笑ふの事ありき

評去歲夏余シラヌシある毎天社(簀)此方彼方と眺望す
ふ所の方よりアカラカイと傳へ(南)の方よりノト口乃

岬海中(突出)一抹の雲と鏡つる末の方よりリイニリレ
フニシリ海の中央より青波揺る事と後ろの月雜樹陰集れ
る中より御の白きものをいふ事と何と問ひ美人等カリニ
のイフイケと答へたり是桜花より此代五六月の以今
と盛りと閑とありとて先生の區春許潭の弁天社に
さけあひりかうらたを思ひお日記の事にて書附あり
今志々のの圖を繋ぎ併せてよみお志々の事あり
此巻の壑尾と水とのあり

一枝紅艷弄嬌柔
六月初旬香正稠
夷虜何須詢國境
此
卷開慶是 皇州

松浦竹四郎評注

安政七庚申年正月發兌

江戸書物問屋

日本橋通北十軒店

播磨屋勝五郎藏版

頭書 蘭溪先生著

四書略解

附錄共

全十一冊

世小國字俗語を以て經典を解釋するその教本のまじりもいふは
 一も童蒙初学は乃小要と得るゆへに今ある略解の書は
 云約して能く教へ給へるの本有る大要は明小より小と
 勝と文を規く物語より小失なく且上層小は本文小字と
 注を留小當時宮室器物の類審小景と画して云と以て解し難
 之の一目小瞭然なりしむれば實小旧來のものとあつた天
 隔せし事小を末学初学は童子一度見ると見れば則とく道
 我以察明より小ハ云小不及で謀をて試むるゆへと雖も
 と得ることありらざる難しあるは書の如くハ海内の人童蒙
 乃多あり一本と修へらるるはせんバゆる屋うらるるものなり

